

「儀礼」から「お別れ会」へ 松本市近辺の葬儀の変化

Change of the Meaning of Funeral Services from a Religious Rite
to a Farewell : Case Study of Matsumoto City and Its Surrounding Areas

福澤昭司

FUKUZAWA Shouji

はじめに

①調査地の概要

②統計にみる松本近辺の葬儀の変化

③変化する葬儀の現状

④変化への対応

おわりに

【論文要旨】

最近、就職活動＝就活になぞらえた、「終活」という言葉を頻繁に目にするようになった。人生の終わりのための活動、といった意味の造語だというのが、急速な超高齢化社会を迎えて切実な問題である。終活といえば、葬儀や墓をどうするかが問題となるが、本稿では、長野県松本市を中心とした地域での、2, 30年前から現在に至る葬儀の変化を振り返って現状を述べ、葬儀の当事者、寺、葬祭業者それぞれの変化への対応を分析した。

松本市では、20年ほど以前には寺や公民館や自宅で行われていた葬儀が、ほぼ10年間で葬儀社の会場へとかわり、今は葬儀の内容が家族葬や直葬へと急速に変わりつつある。その要因としては、近隣社会が葬儀を担えなくなったこと、核家族化と世帯員の高齢化や景気の低迷などがあり、状況が変化する中でやむを得ず葬儀は変化してきた。この変化に対して、それぞれの立場からの対応がある。終活をする当事者は、該当する地域の習俗や寺、近隣社会に任せきりだった葬儀に主体的にかかわろうとし、様々なアプローチをしている。そして葬儀の規模や内容については、簡素化の流れで「家族葬」あるいは「直葬」という形が一般的になりつつある。葬祭業者は、自前のホールを造ることで次々と事業を拡大してきたが、葬儀の小規模化の流れの中でエンディングの学習会を開くなど、ユーザーを確保しようとしている。一方、大部分の寺は、葬儀の小規模化、簡素化の流れの中でも檀家システムにのっただけで変わろうとはしていない。しかし、ここで取り上げた松本市の神宮寺のように、葬儀社よりも安くその人ならではの葬儀を行い、檀家外からも利用者を集めている寺もある。神宮寺の葬儀の人気は、費用面や住職の人柄もあるだろうが、何よりも葬儀への人々の意味付けを先取りし、寺の論理を後ろに納めて、故人とのお別れ会というコンセプトを大きく表に出したことにありとされる。

【キーワード】核家族、高齢化、家族葬、直葬、義理

はじめに

最近、葬儀や墓の変化に対してどう対応したらよいのかといった話題が、マスコミをたびたびにぎわしている。つい先日、テレビの長時間のニュース番組に島田裕巳氏と井上治代氏が出演し、葬儀と墓の現状と今後の展望について語っていた。また、少し前には大衆週刊誌が、「本当に安くて恥をかかない「葬式と墓」」と題して特集を組んだり、葬儀と墓の話題を都道府県ごとに編んだ雑誌が創刊されたりもしている。

以前から地域社会の解体だとか家族の崩壊などが、一部の先端的な部分での問題として話題にはなっていたが、多くの人々は自分には関係ないものとし、そこから派生する葬儀のありかた等については、ほとんど何も考えずにきた。親が亡くなったら周囲のいうことに任せ、自分が亡くなったら子どもに任せればいいという「お任せ」主義が、伝統的な葬儀のありかただったのである。周囲に合わせるという事が、葬儀に限らずこの国で暮らしていくスタイルだったし、良きにつけ悪きにつけ、それが習俗というものを形成し伝承させてきた源でもあった。

ところが、地域社会と家族の急激な変化により、「お任せ」主義では少なくとも葬儀や墓についてはどうにもならなくなり、自分なりの状況にあった方法をとらざるをえなくなってきたのである。人々は葬儀や墓を今後どうしたらよいのかについて困り始め、何か指針がないかと求めて関心が高まり、マスコミでも盛んに特集を組むようになった。

こうした求めに応えてゆくのが、民俗学の務めではなかろうか。そこで筆者が居住する地方都市松本市とその近辺を主なフィールドとして、とりあえず変化する葬儀の現状とそれに対する当事者、寺、業者の対応を分析して今後の見取り図を描いてみたい。

①……………調査地の概要

毎年夏に開催されるサイトウキネンフェスティバルで知られる松本市は、長野県のほぼ中央部に位置し、東は美ヶ原高原から西は北アルプスの頂上までを境とし、面積は978.77平方キロメートルで県下の広さを誇っている。市の中心部には戦国時代末期に築城された国宝松本城がそびえ、歴史探訪や豊かな自然を求めて、多くの観光客が訪れている。2013年（平成25）8月1日現在の人口は、243,172人である。標高は約600メートルであり、盆地特有の気候で昼間の気温はあがるものの、夜間はかなり涼しくなる。長野県を代表する都市の一つとして栄えているが、最近は中心市街地の空洞化が進み、シャッターのしまった商店街もみられる。

表1は、1975年（昭和50）からの、5年ごとの松本市の年齢別人口と世帯数の推移である。⁽¹⁾ まず人口からみると、1975年の205,000余名から35年後には243,000余名へと38,000人程増加しているが、2005年と2010年の近隣町村との合併を含めての結果である。2000年から2005年にかけては合併があったにもかかわらず、世帯数は増えたものの総人口は若干減少している。全体として人口はやや増加もしくは、ほぼ横ばい状態といえるだろう。これを年齢別にみると、1975年から2010年にかけて最も増加しているのは75～79歳で8,046人の増加、次いで60～64歳で7,918人

表 1 年齢(5 歳階級) 別人口、世帯数の推移(1975 年～2010 年)

区 分	1975 年	1980 年	1985 年	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年
世帯数	60,001	65,972	69,776	74,758	82,037	88,375	89,266	97,224
総人口	205,180	212,182	217,601	220,764	225,799	229,033	227,627	243,037
1 世帯当たり人口	3.37	3.17	3.06	2.91	2.71	2.57	2.55	2.50
0～4 歳	17,316	14,892	12,759	11,695	11,710	11,898	11,147	11,105
5～9 歳	15,375	16,965	14,647	12,463	11,550	11,169	11,226	11,434
10～14 歳	14,141	15,165	16,608	14,339	12,203	11,173	10,795	11,630
15～19 歳	13,185	14,246	15,580	17,093	14,774	12,721	11,527	12,405
20～24 歳	14,198	13,067	14,300	15,241	17,434	14,693	12,421	11,837
25～29 歳	18,305	15,249	13,906	14,850	16,695	18,711	15,353	13,367
30～34 歳	16,399	18,361	15,181	13,949	15,329	17,264	18,419	16,234
35～39 歳	14,827	16,082	18,043	14,972	13,898	14,974	16,415	19,246
40～44 歳	15,306	14,436	15,709	17,700	14,780	13,664	14,439	17,009
45～49 歳	14,819	14,681	14,134	15,383	17,451	14,400	13,173	14,986
50～54 歳	12,257	14,255	14,365	13,720	15,045	17,009	13,890	13,711
55～59 歳	9,659	11,801	13,938	13,943	13,426	14,668	16,371	14,566
60～64 歳	9,303	9,185	11,361	13,449	13,545	13,066	14,211	17,221
65～69 歳	7,691	8,589	8,631	10,783	12,718	12,838	12,454	14,794
70～74 歳	6,183	6,740	7,694	7,889	9,891	11,800	12,031	12,702
75～79 歳	3,723	4,903	5,604	6,538	6,804	8,716	10,488	11,769
80～84 歳	1,698	2,497	3,411	4,173	5,013	5,386	7,190	9,397
85～89 歳	637	841	1,368	1,959	2,555	3,250	3,862	5,669
90～94 歳	124	198	325	545	826	1,224	1,715	2,255
95～99 歳	12	23	36	71	138	255	429	669
100 歳以上	—	1	1	3	9	18	48	97
不詳	22	5	—	6	5	136	23	934
老年人口(65 歳以上)	20,068	23,792	27,070	31,961	37,954	43,487	48,240	58,286
総人口での割合	10%	11%	12%	14%	17%	19%	21%	24%

の増加、次が 80～84 歳の 7,699 人の増加である。総じていえば、35～39 歳以上は多少の違いはあっても人口は増加しているが、30～34 歳以下ではいずれも減少しているのである。さらに 65 歳以上の老年人口の割合は、10%から年々増加して 2010 年には倍以上の 24%、実数では 20,000 人から 58,000 人にも増加した。

世帯数の変化では、35 年間で 60,000 世帯から 97,000 世帯へと 37,000 世帯もの増加がみられる。人口がさほど増えずに世帯数が増加したことは世帯構成人員の減少を招き、1 世帯あたりの人口構

成は3.37人から2.50人へと毎年減少している。2.5人という世帯構成員をどう見るかは後で考察するとして、ともかく家族を構成する人数が年々減少し、今は平均2人～3人になってしまっているのである。

松本市においても高齢化といわれる現象は、年々拍車がかかっているように思われる。その上、高齢者全般の数が増えるばかりではなく、これまでは数えるほどしかいなかった90歳以上の方も多数存命されているようになった。世帯の構成員が減少しながら、超高齢者が増加した場合どんなことが起こるか、世帯の家族類型から考察してみよう。

表2は世帯の家族類型別世帯数と世帯人員である。親族世帯の内70%余りが、親と未婚の子からなる核家族であり、残り30%が3世代からなる世帯だということがわかる。また注目すべきことに総世帯の13%にあたる32,000世帯が、単独世帯、つまり一人暮らしなのである。老年人口の所属する世帯をみると、65歳以上の世帯員がいる世帯は、全世帯の38%にあたる37,000世帯であり、そのうち21%が単独世帯である。つまり、65歳以上のお年寄りのいる家では、5軒に1軒が一人暮らしなのである。75歳以上の世帯員がいる世帯は、全世帯の22%、85歳以上の世帯員がいる世帯は全世帯の約7%にあたる。しかも75歳以上、85歳以上の世帯員がいる世帯のいずれもが、20%前後は単独世帯なのである。

以上、細かくみてきたが、親族世帯の多くが親と結婚しない子どもからなる核家族であり、単独世帯、それも高齢者の単独世帯がかなりな数にのぼるのである。

表2 世帯の家族類型別世帯数・世帯人員

区分	総数	親族世帯			単独世帯	非親族を含む世帯
		総数	核家族世帯	核家族以外の世帯		
一般世帯数	97,130	64,219	51,828	12,391	32,124 (33.1%)	787
一般世帯人員	237,630	203,534	147,426	56,108	32,124	1,958
65歳以上の世帯員がいる						
世帯数	37,122 (38%)	29,315	18,463	10,852	7,647 (20.6%)	160
世帯人員	100,726	92,562	43,113	49,449	7,647	517
65歳以上の世帯人員	54,479	46,592	30,381	16,211	7,647	240
75歳以上の世帯員がいる						
世帯数	2,136 (21.9%)	16,824	8,722	8,102	4,447 (20.8%)	89
世帯人員	60,135	55,365	19,554	35,811	4,447	323
75歳以上の世帯人員	27,408	22,852	12,748	10,104	4,447	109
85歳以上の世帯員がいる						
世帯数	6,624 (6.8%)	5,423	1,866	3,557	1,170 (17.7%)	31
世帯人員	20,223	18,929	4,079	14,850	1,170	124
85歳以上の世帯人員	7,267	6,059	2,224	3,835	1,170	38

②……………統計にみる松本近辺の葬儀の変化

後に表5で示すように、年をおうごとに松本市の死亡者の総数は増加する傾向にある。長寿社会を迎えて元気な高齢者がたくさんいるということは、超高齢で亡くなる方も増加しているのである。年々増加する死者は、どのように葬られているのだろうか。表3は長野県と東京都の埋葬及び火葬死体数である。松本市の統計ではなく、長野県全体の統計であるが、長野県の統計から松本市の傾向も類推できると考えた。まず、死者の総数が東京でも長野県でも、かなりな数で増加していることがわかるだろう。増加する死者の葬り方では、もちろん火葬がほとんどであるが、東京ではわずかな割合ではあるが埋葬数が横ばい状態で続き、長野県では埋葬は急激に減りつつある。

筆者の父方の祖父は、松本市で生まれ近郊の山形村に転出して1965年(昭和40)に亡くなったが、土葬だった。当時、村では普通に土葬がおこなわれていた。祖母は1973年(昭和48)に亡くなった。本人は、熱くていやだから火葬にはしないでくれといていたが、祖父の葬儀から8年経過しただけなのだが土葬の例は既になく、迷わず火葬にした。昭和40年代には松本近辺では、ほとんどが土葬から火葬に変わったのである。

表4は、市民タイムスという地域新聞のお悔やみ欄に掲載された、各年2月の松本市内在住者の葬儀会場一覧である。新聞に全ての葬儀が掲載されるわけではないが、大方の葬儀会場の変化の傾向はこれでつかむことができる

と考えた。まずいえるのは、ほとんどの葬儀が葬祭業者所有の会場で行われるようになったということである。1990年の0からすれば、20数年間での変化は目を見張るものがある。では、90年代まではどこで葬儀が行われていたかといえば、寺・公民館・自宅などである。これ

表3 埋葬及び火葬死体数

	地域	死体総数	埋葬	火葬
1996年	長野	18198	288 (1.58%)	17910
	東京	77371	32 (0.04%)	77339
2003年	長野	20992	57 (0.27%)	20935
	東京	87378	18 (0.02%)	87360
2010年	長野	24740	1 (0.004%)	24739
	東京	106555	17 (0.02%)	106538

(年度別衛生行政から作成)

表4 葬儀会場の变化

年代	自宅	公民館	寺	神社	その他	葬儀業者	合計
1990	10	36	62	1	6	0	115
1991	5	35	49	6	3	1	99
1995	2	38	49	2	4	5	100
1996	4	33	48	3	1	20	109
2012	1	0	9	0	0	94	104
2013	1	0	12	0	2	112	127

(『市民タイムス』各年2月の集計から)

によれば、自宅で行っていた葬儀は90年代以前に寺や公民館といった広い場所に变化し、しばらくは寺が主流だったが、2000年代には葬祭業者の会場へと移ったことがよみとれる。さらに、この表には示せなかったが2013年には、「家族葬でおこないます」という記述や、葬儀会場を明記しなかったり「葬儀は近親者ですませました」と事後報告であったりするような、これまでとは違った告知がいくつも見られるようになった。

では、最近目につくようになった「家族葬」とは何だろう。広辞苑で調べても掲載されてはおらず、葬祭業者に聞いてみると、業界による近年の造語が広まったもののようである。業者が少数の近親者だけの参加による葬式、といった意味で言い始めたもので、葬儀の流れには以前との変更はないという。

③……………変化する葬儀の現状

(1) 近隣社会の変化

松本市近辺での葬儀が変化してきている姿を概略述べたので、変化する現状を要因別にもう少し詳しく述べてみたい。葬儀会場の変化の要因としてあげられるのは、既に何度もいわれていることではあるが、近隣社会の変化である。

20年ほど前の寺や自宅で行う葬式では、隣組の果たす役割が大きかった。葬儀委員長は隣組長が務め、葬式の予定を立てて火葬場の手配をした。男性は、近くから遠くまで葬式のサタ（通知）を持って歩いたり、葬式の司会、弔電奉読、受付、会計、ゲタ番、などをしたり、女性は、ごはん・おつゆ・酒・漬物・天ぷらなど、通夜と本葬の料理を受け持った。今から2,30年前までは、夫婦で最低2日間は手伝いのためにつぶれたという。昔は自営業が多く、仕事を休んで葬式の手伝いに出ることが自分の裁量でできた。当時は勤め人が少なく、会社関係の人が葬式に出たり、花輪（今は生花を飾るが昔は造花の花輪）をあげたり弔辞を読むようなこともあまりなかった。それに、多数の会葬者があったわけではなかったという。

さて、松本市の中心市街地に位置するマンションまで含めて450戸のT地区N町会では、2009年（平成21）に葬式が9件あった。9件の内、2件は家族葬で隣組の手伝いを断られ町会としての香典も受け取ってもらえなかった。また、9件の内4件は町内の寺を会場として料理は仕出しをとっておこない、5件は葬祭業者の会場だった。隣組の仕事は受付程度で、ほとんど仕事はなかった。N町会では、5～6軒で一つの組を作り、10組前後が集まって班を作っている。同じ組に属する家では、通夜には各戸1名ずつ集まって線香をあげに行き、葬式にも参列する。町会長は葬式に参列し、精進落しにも出る。隣組の組員は会葬はするものの、全て業者に任せてあるために形式ばかりのお手伝いで今は仕事がない。以前のように、葬式の手伝いのために幾日も仕事を休むこともない。自営業ならば仕事を休んでも自分の段取りで何とかだったが、サラリーマンではいくら義理とは言いながら続けて幾日も休むことは難しく、手伝いを頼む側も心苦しくなって、一切を頼めて駐車場も備えている葬祭業者の会場へと表4のように、急速に変わっていったのである。

N町会の状況は、松本市内の大部分でいえることである。それに加えて、最近では病院で亡くな

ると家に帰らず遺体を直接葬祭業者の会場へ運んで、通夜も業者の会場で行う例が増えているという。ある業者では、ユーザーの8割までが通夜も利用しているという。施主となる人が故人と同居せずに遠くの都市で暮らしていると、遺体を家に連れ帰って通夜をするという意識が薄く、全てが用意されている業者の会場を利用することが多くなるという。そればかりか、遠くから通夜にやってくる親戚には宿泊の希望も多く、先の業者では、6年前に宿泊できる民家風の通夜の会場を新設している。

(2) 家族構成の変化

基本的には現在も同じであるが、故人が高齢で亡くなった場合の葬式の喪主は、故人の成人した男の子ども、いなければ女の子どもの配偶者もしくは本人が務めるのが普通だと考えられている。昔でいえば、同居する長男が務めるものだと思われていた。これは、典型的な家族の形態として3世代同居がイメージされており、イエの継承を前提として習俗の役割分担が考えられているのである。しかし、実際にはどうだろう。先の、表2松本市の世帯の家族類型別一般世帯数・世帯人員に戻ってみるならば、世帯の多くを占める親族家族の72%は、夫婦と結婚していない子どもからなる核家族であり、3世代からなる家族を一般的だと想定するのは幻想だということがわかる。そして核家族の平均親族人員は約3人だから、1世帯の子どもの数は1人か2人しかいないということになる。さらに詳しくみると、核家族の4分の1は夫婦のみの家族で、子どもはいないか同居していないかなのである。したがって、イエは継承されないケースがいくつもあるだろう。また、年々増加している単独世帯では、イエは完全に途絶えてしまう。このように、イエの継承はともかく、子どもがいなかったり子どもの数が少なかったりすることから、高齢者はこれまでなら後とりが務めた自分の葬儀の執行を、誰が責任持ってくれるのか予測ができにくくなってきているのである。

(3) 高齢化

表5は松本市の年齢階級別死亡者数の推移である。最近の10年間で、もともと数少ない乳幼児の死亡がさらに減り、70歳代と80歳代以上の死者の数が増えている。特に80歳代以上では、ほぼ倍になっている。死者の総数が増えているが、その他の年齢では、増加と減少を繰り返して増減する一定の傾向は認められないだけに、高齢で亡くなる人の増加は際立っている。

同じ亡くなるでも高齢で亡くなった場合は、仕事を通じた人間関係や地域の役職を通じた地域社会との関係などから引退して長く時間がたち、付き合いの範囲が狭まったり関係していた人々は亡くなったりしてしまっている。親族関係をみても、世代が代わったり遠くへ転居してしまったりして、親戚づきあいが疎遠になってしまっている場合が多い。そこで、故人が生前に関係していた葬儀の関係者は少なくなり、会葬者が多いとすれば息子あるいは娘の関係者だということになる。2011年(平成23)に93歳で亡くなった松本市内の女性は、兄弟姉妹も友人も既に亡くなり、代変わりしているということで実家からも人は来なかった。病院に長く入院していたこともあり、会場とした寺でみんなやってくれるというので隣組の手伝いも辞退した。そんなことで、葬式に出たのは故人と同居していた娘夫婦と孫夫婦とその子、その他には故人の子どもたちと町会長だけで、家族葬とはいわなかったが結果的に少人数の葬式になったという。

表 5 年齢 (10 歳階級別) 別死亡者数

(単位 人)

年次	総 数		0 ～ 9		10 ～ 19	20 ～ 29	30 ～ 39	40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 歳～	不 明
9	1,473		9	(3)	3	18	20	52	87	239	314	731	—
10	1,469	(8)	20	(8)	3	16	16	45	108	216	352	693	—
11	1,524	(6)	13	(6)	5	17	20	40	95	225	375	734	—
12	1,528	(8)	13	(8)	2	15	13	36	122	213	409	705	—
13	1,572	(6)	12	(6)	2	19	17	44	96	213	406	763	—
14	1,600	(0)	4	(0)	2	9	24	44	107	177	429	804	—
15	1,653	(9)	17	(9)	4	10	21	26	125	192	419	839	—
16	1,689	(1)	10	(1)	3	11	11	46	109	191	426	882	—
17	1,936	(3)	5	(3)	8	10	27	50	101	212	460	1063	—
18	1,877		7		5	11	18	36	94	175	455	1076	—
19	1,960	(1)	5	(1)	5	15	18	37	108	204	432	1136	—
20	2,018	(1)	4	(1)	7	8	22	39	94	224	424	1196	—
21	1,990	(5)	6	(5)	7	11	12	43	79	200	393	1239	—
22	2,198	(2)	7	(2)	6	10	21	46	79	242	438	1349	—

・長野県松本保健所「人口動態統計」から作成
() 内は内数で、新生児の死亡者数

このように、高齢で亡くなった場合には葬儀の会葬者は自然に少なくなる傾向にあり、ならばいつそのこと一般の方の会葬は遠慮してもらって、親族のみで温かく故人を送りたいという、「家族葬」のニーズが発生するのである。

④……………変化への対応

(1) 当事者と遺族の対応

信州大学社会人大学院を卒業した人たちで作る、NPO 法人信州地域社会フォーラムは、慣習にとらわれず自分らしい葬儀の形を考えようと、2013 年 3 月 7 日に松本市の東昌寺で模擬葬儀をおこない、新しい葬儀のありかたとそれを生かす方法を学んだ。企画した東昌寺住職の飯島恵道氏は、以前は看護師として終末期医療に携わり、医療現場では本人の意思が尊重されるのに、葬儀の場面では本人の意思が軽んじられ、家族や親せきの思うままにされていることに疑問をもち、この企画を考えたという。1 月には死生学入門を学び、2 月には死別の悲嘆を語り合う会を開いたうえで、模擬葬儀を開催したのである。新聞に掲載して模擬葬儀の参加者を募ったが、予定した 50 名を上回る 60 名もの希望者が集まった。参加者は松本市在住とは限らないが、皆さん葬儀の費用や葬儀のやりかたに疑問をもち、新しい葬儀の形に興味を感じられていたという。主催者が予想した以上に参加者が集まったことが、葬儀に対する一般の人々の関心の高さを示している。慣習どおりの葬儀のやり方に、多くの人々が疑問を持ち始めているのである。

また、全国紙ではあるが次のような投書を目にした。

母の葬儀について悩んだ。世の中では世間体を気にし、葬儀社の勧めるまま盛大な葬儀が営まれることも多い。だが、私は日頃から、形骸化した葬儀に違和感を覚えていた。また母は傘寿の高齢だったので、友人の多くも亡くなっているか、生きていても外出が難しい人が多い。さらに親族も遠くに住み、疎遠だ。考えた末、家族葬にした。

母が旅立った晩、小さな葬儀場を借り切り、私たち夫婦と息子夫婦ら9人による通夜をした。母は納棺師により身づくろいされ、顔には化粧が施された。アルバムを開け、飲食しながら懐かしい思い出を語った。翌日、僧侶による読経の後、母を生花で埋め尽くした。そして、火葬場に向かい、家族で骨を拾った。

普通の葬儀とは異なる、身内だけの慎ましやかな葬儀であった。しかしながら家族にとって⁽²⁾はきずなを深める濃密な葬儀となり、天国で両親も微笑んでいることと思う。

投書をされた方は仙台市在住の医師とある。経済的理由から家族葬を選んだのではなく、形骸化した葬儀に違和感を覚えて熟考の後に家族葬を選択されたのである。

松本市内でも先に述べたように家族葬が増加している。N町会の町会長によれば、家族葬の場合は次のような対応になる。亡くなると、通常の葬式のように喪主の方が組長に連絡をするが、「〇〇が亡くなったが兄弟だけでやりますので、お手伝いや弔問は来ていただかなくて結構です」と伝える。この地区で家族葬をやるのは、普段から近所づきあいがなかったり、高齢だったりだとか、病院に長く入院していたとかで人づきあいが少ないとか、あるいは子どもがいないとか経済的な理由によるとかの場合だという。

投書の方は、家族葬が身内のきずなを深める濃密な葬儀だったと満足されているが、周囲からは別の反応もある。

先日、親族が亡くなり、葬儀を家族だけで執り行うという連絡があった。親族が家族葬をするのは初めてであり、戸惑いと若干の違和感を覚えたが、仕方のないことである。最近では新聞の「お悔やみ欄」で「近親者のみで行いました」との一文を良く見掛けるようになった。少しずつでも増えていけば、だんだんなじんでくると思う。⁽³⁾

いきなり、なじみのない家族葬でやりますといわれたら、この方のように誰もがとまどってしまうのではないだろうか。数年前、施設に入っていた筆者の叔父が亡くなり、家族葬でやるとの連絡がまわった時は、違和感というよりもそんな義理を欠くようなことをしてよいのか、という怒りを感じている親戚が多かったように覚えている。怒りをもう少し説明するなら、一つには故人から香典をもらっている親戚が義理を返す機会を奪われてしまうということ。（これには誤解があって、家族葬といえば家族のみで親戚一同は排除されると思ったのだが、実際には親戚＝故人の兄弟姉妹は出席して、一般の会葬者はなかった。）もう一つの怒りは、最後の義理だということに出費を惜しむなんて故人が気の毒だということ。二つとも遺族の気持ちを無視した、周囲の者の勝手な思い込みであるが、とかく葬式ではそうした感情が表出しがちである。T地区連合町会長は、家族葬は迷惑だと語った。それは、葬儀に出席できればその場で義理のお返しができるのに、出席できないから盆とか彼岸などの機会をみつけて、何とかして義理を返すまで気持ちが落ち着かないからだという。

もらった義理は必ず返さなければいけないという互酬性の原理は、特に葬儀において顕著である。葬儀では、必ず誰からいくら香典をいただいたか記帳しておき、会葬してくれた人に不幸があれば同等の額を香典としてお返ししてきた。こうした義理の応酬は、かつては血縁関係と地縁関係の人が大部分だったが、今は血縁関係の人は少なくなり地縁関係の人は関わりが薄くなってきている。それらに代わったのが、社縁とでもいえる勤務先の関係者だと考えられる。そこで会社での義理を人々がどう考えているのか、松本市内に勤める会社員に社内の関係者の葬儀に弔問するかどうかのアンケートをとった。30人から得た回答の集計が表6である。男女も世代もばらばらだったが、男女や世代による回答の傾向はうかがえなかったもので、それらは無視して集計した。

表6 社内弔問アンケート

1	会社の同部署の上司の親御さんが亡くなったら弔問はどうするか。	%
①	都合がつく限りうかがう。	20
②	弔問に行く人があれば香典をあずける。	47
③	弔問には行かない。	33
2	会社の同部署の同僚の親御さんが亡くなったら弔問はどうするか。	
①	都合がつく限りうかがう。	27
②	弔問に行く人があれば香典をあずける。	46
③	弔問には行かない。	27
3	会社の同部署の上司の配偶者が亡くなったら弔問はどうするか。	
①	都合がつく限りうかがう。	40
②	弔問に行く人があれば香典をあずける。	37
③	弔問には行かない。	23
4	会社の同部署の同僚の配偶者が亡くなったら弔問はどうするか。	
①	都合がつく限りうかがう。	44
②	弔問に行く人があれば香典をあずける。	33
③	弔問には行かない。	23
5	会社の同部署の上司が亡くなったら弔問はどうするか。	
①	都合がつく限りうかがう。	83
②	弔問に行く人があれば香典をあずける。	17
③	弔問には行かない。	0
6	会社の同部署の同僚が亡くなったら弔問はどうするか。	
①	都合がつく限りうかがう。	97
②	弔問に行く人があれば香典をあずける。	3
③	弔問には行かない。	0
7	自分の身内の葬儀の弔問に来てもらっている会社の方に葬儀があったら弔問はどうするか。	
①	お返しをしなければいけないので必ずうかがう。当日知らなければ、後からでも必ずおたずねして香典を差し上げる。	57
②	誰か弔問に行く人に香典をあずける。	23
③	今の所属部署が異なっていれば弔問に行くかどうかはこだわらない。	20

(松本市内勤務の30人の集計)

1～4は会社の上司・同僚の父母や配偶者といった関係者の葬儀に行くかどうか、5・6は会社の上司・同僚本人の葬儀に行くかどうか、7は来てもらったらお返しに弔問するかどうかを聞いた。1～4については、会葬するかどうかは本人の考え次第で回答はバラつき、これといった傾向はない。5・6の会社で直接つきあいのある人が亡くなった場合には、大部分が会葬すると考え、同僚ならなおさらである。ところが、自分の身内の葬儀に会葬してもらっている会社の同僚に不幸があった場合には、6割程度の人が会葬すると答えているだけで、全員が必ず会葬しようと考えているわけではない。20%の人は、部署が変われば行くかどうかかわからないと答えている。会社という組織でもらった義理は一時的なもので、どうしても返さなければいけないとは考えられていないのである。

親族間の義理は、一般的な忌引の規定の範囲でわかるように、会葬する側にとってのおじやおばが亡くなるまで繰り返されてきた。親族以外の義理では、応酬を始めた双方が亡くなるまでは少なくとも続けられてきた。ところが、先にみた会社での義理のように、最近は親族間でも義理の意識が薄くなってきているように思われる。家族葬で会葬者を故人の子どもとその関係者に限った場合、おじやおばにあたる人は排除されて、もらった分の香典を返すことができなくなってしまう。しかし、弔問を受ける側から辞退されるのだから致し方なく、最初は違和感を感じられながらも家族葬は一般化しつつある。

(2) 寺の対応

これまで長い不況が続いてきた。人々は少しでも安い物を求めてきたが、宗教儀礼とはいいいながら葬式についても、できるかぎり低価格でという願いは当然でてくる。2009年9月、大手スーパーのイオンは独自に定めた一定のサービスを定額で提供することに同意した葬儀業者と連携し、イオンが定額で利用者からの依頼を受けて業者を紹介する事業をスタートさせた。この事業の眼目は、料金体系の透明化であり、当初は僧侶の紹介料やお布施の額まで明示したことから、仏教界からは大きな反発があった⁽⁴⁾。この件について2011年1月の『週刊仏教タイムス』⁽⁵⁾で全日本仏教会事務総長の戸松義春氏は、「イオンが葬儀事業に参入したこと自体に全日本仏教会（全日仏）が反対しているわけではありません。イオンの葬式は僧侶紹介やお布施の明示など、一般の人にとってわかりやすさ、便利さはあります。しかし、それはサービスの対価という考えによるもので、お布施の精神からもたらされたものではありません。」「全日仏はこれまでイオン側と何度か話し合いを持ちました。一貫して主張してきたことは、お布施の料金の体系化・全国統一化・明示化は差し控えていただきたいということです。地域や故人・遺族の経済状況、お寺や僧侶との関係、あるいは宗派もあるかもしれませんが、そうしたさまざまな状況からお布施は決まってくるものです。全国一律ということは、そもそもあり得ない」と述べて、お布施を明示することに反対しつつ、「仏教界は檀信徒や地域の皆様の声を真摯にお伺いする必要性を痛感しています」と、仏教界に対して反省をうながしている。

一方、松本市浅間温泉にある妙心寺派神宮寺の住職高橋卓志氏は同紙面で、神宮寺が檀信徒を対象に葬儀・法事などを含めた経理の公開をしていることを、2009年の数値で具体的に説明し、「この記載は、檀信徒にとって葬儀のガイドラインとなり、お布施の内容についての周知と納得が得ら

れていった」と、その効果を述べ、さらに葬儀の内容の改革にも取り組んだり、寺を中心とする小規模地域における高齢者や病者へのケアシステムを稼働させたりする中で、「寺が本来、非営利組織であり、公益性を多大に有し、地域において核に成り得る潜在性を保持した組織であることが再確認できた。このことが、葬儀および寺の運営において、お布施を含んだ正確な情報公開と説明責任の履行を強化させていった」と、お布施の額を公開することに意義を感じて、積極的に応ずるべきだとしている。そして、「丁寧に、死に逝く人々や遺族と向き合ってこそ、「お布施」は真正面から授受されるようになるものだ⁽⁶⁾」と述べている。

この2人は、お布施の料金表を明示して全国一律にするなどあり得ないという考えと、お布施を含めた寺の経理を公開することで檀信徒の納得と信頼とが得られるという考えで、一見真逆で対立しているかにみえて、本来お布施は宗教的な目的に基づいた行為である、あるべきだという点では一致している。違うのは、寺が真の意味での宗教的行為をしているかどうかという点での評価なのである。そこで、現在の仏教界の在り方に苦言を呈する高橋卓志氏は、どのような葬儀をしているか、2012年末から2013年初の葬儀にかかわる出来事として私が聞き取った内容が、高橋氏自身の手で「寺が「創る」葬式（上）・（下）」として雑誌『S O G I』にまとめられているので、そちらから寺の奮闘ぶりを紹介してみたい。

12月30日の夕刻、高橋氏は大学病院に入院しているMさんから、自分の死後処理してくれる人はいないので、すべてをお願いできないかという電話を受けた。翌31日深夜、病院からMさん死亡の連絡がはいる。「身寄りのないMさんは、自身の言葉のとおり私にすべてを託し旅立っていった。檀家の一人であるMさんは、入院中の一ヶ月間に二度、私の寺を訪ねている。しかし、私は、出かけていて会えず、電話による対応となった。その間にがん細胞は、Mさんの全身を一気に浸食した。そして、看取る人もいない病院の個室で息を引き取ったのだ。私はすぐ病院に駆け付けた。担当医から病状説明を受け、死亡診断書を書いてもらい、Mさんの数少ない荷物を預かり、遺体搬送を依頼し、寺に運び安置した。安置し、枕経が終わったのは午前四時だった。」⁽⁷⁾年末年始は火葬場も休みのため、その間はMさんの遺体は寺に安置されることとなったが、その時点で、前日に亡くなり、家庭事情が複雑で家に帰ることができないIさんの遺体が既に寺に安置されていた。年が明けて新年2日には、神宮寺近くの旅館に嫁いだ方の実家から看護のために引き取られていた方が亡くなり、実家での本葬を行うための密葬をすると事前相談してあったので、この方の遺体も受け入れて安置した。

いずれの場合も、「正月、神宮寺を訪れた死者たちに関わる人々が「事前」に「相談」したなかに、「もしも、亡くなった場合、遺体は寺へ搬送する」という合意がなされていた。だから、私は、「事前相談」に基づき、遺体を受け入れた。」のだという。そして「12月30日深夜に始まった死者たちの訪れは、その後も止まらなかった。1月21日までの23日間で神宮寺では13軒の葬儀を引き受けることになった⁽⁸⁾」というのである。

神宮寺の1月の葬儀13件の内容を示したのが表7⁽⁹⁾である。まず葬儀会場をみると11件が神宮寺で1件は自宅、葬儀社の会場はわずかに1件しかない。そして、やむを得ない事情の3件を除いて10件は事前に相談している。葬儀社を会場とする葬儀が一般化する中で、神宮寺では年間85～90%が寺を会場として葬儀をおこなっているという。さらに注目すべきは、13件中7件は檀家

表7 2013.1.4～1.23の神宮寺の葬儀

	死亡日	葬儀日	名前	性	年齢	相談	檀家?	搬送	預り	葬儀形式	葬儀社の関与	通夜場所	通夜参列数	葬儀場所	葬儀参列者
1	12月30日	1月4日	M.I	男	74	有	檀家外	病院→寺	6日	家族葬	一部	寺	10	寺・座敷	12
2	12月31日	1月4日	M.M	男	67	有	檀家	病院→寺	5日	寺葬	なし	寺	0	寺・座敷	2
3	1月2日	1月4日	F.O	女	100	有	檀家外	病院→寺	3日	通夜・密葬	一部	寺	20	寺・本堂	30
4	1月3日	1月6日	S.U	男	88	有	檀家	病院→自宅	なし	一般葬	一部	自宅	30	寺・ホール	100
5	1月5日	1月8日	K.O	女	83	有	檀家外	病院→寺	4日	一般葬	一部	寺	20	寺・ホール	60
6	1月9日	1月11日	H.F	男	72	有	檀家	病院→寺	3日	家族葬	なし	寺	8	寺・座敷	12
7	1月9日	1月11日	T.M	男	42	なし	檀家外	自宅	なし	家族葬	なし	自宅	3	自宅	3
8	1月10日	1月12日	M.S	男	88	なし	檀家	病院→自宅	なし	一般葬	一部	自宅	20	寺・ホール	90
9	1月10日	1月13日	I.K	男	88	有	檀家	施設→寺	4日	家族葬	一部	寺	20	寺・ホール	40
10	1月14日	1月17日	K.K	女	78	有	檀家外	病院→自宅	なし	一般葬	一部	自宅	15	寺・ホール	100
11	1月17日	1月21日	Y.A	男	78	有	檀家外	葬儀社	なし	一般葬	全面	自宅	25	葬儀社斎場	80
12	1月20日	1月23日	H.I	女	88	なし	檀家	病院→自宅→寺	1日	一般葬	一部	寺	12	寺・ホール	40
13	1月21日	1月23日	S.T	女	95	有	檀家外	施設→寺	2日	家族葬	なし	寺	8	寺・座敷	8

(高橋卓志「寺が「創る」葬式」『SOGI』No.133から)

外なのである。これを年間でみると、2010年の全48件の葬儀中25件が檀家外だったというから、この1月だけが例外的に檀家外が多いわけではない。葬儀の形態では、家族葬が5件、一般葬が6件、それ以外が2件となり、家族葬が多くなっていることがうかがえる。

神宮寺では、死に近く本人と家族と寺とが共働して葬儀を作り上げる、というコンセプトに基づいた葬儀準備用の冊子『あなたが旅立つ日のために』を、檀信徒全家庭に配布している。その中の、葬式に至る手順を追っての説明の部分での、「旅立ちのとき」という項では、以下のような説明をしている。

●まず神宮寺に電話を……納得のお葬式はここから始まります

あなたに「旅立ち」が訪れたとき、あなたを看取った家族が、最初に電話をかける先は葬儀社ではなく、神宮寺です。その電話から「あなたらしいお別れ」が始まるのです。無駄が省かれた、実質的で、納得できるあなたのお葬式が始まるのです。ご家族には、搬送方法、当面の動きなどをお教えしたうえで、搬送車の手配をします。

電話受け付けは24時間。真夜中の電話もOKです。⁽¹⁰⁾

とにかく、いつでも何かあったら寺に一報してもらえば、寺と遺族とが相談しながら互いに協力して、故人にふさわしい葬儀を作ろうというのである。高橋氏は、「カバンに衣を詰め、葬儀社ホールに向き、短時間、しつらえられた豪華な祭壇に向かってお経を読むだけでことたりという、⁽¹¹⁾現行葬儀の多くが陥ったものの対極を作ろう、と考えた」のだという。

先の表に戻ろう。死後の搬送先を神宮寺とし、通夜の場合から神宮寺を選んだのは8件で、60%を超えているが、ここ数年は通夜から行う葬儀が60%を超えているので例年通りだという。葬儀参列者は多いものもあるが全体的に少なく、年々縮小傾向にあるという。

こうしてみると、家族葬の増加・規模の縮小化・自宅外での通夜の増加など、神宮寺で行われる葬儀も世の中全体の傾向を示している。異なるのは、神宮寺の葬儀の多くが寺の座敷やホールを会場としている点である。

高橋氏は自身が僧でありながら、現在の仏教界のありかたについて、著書で痛烈に批判し、次のように述べている。

日本の伝統仏教が「葬式仏教」と揶揄される風潮は、坊さんが葬式しかしない、あるいは人々の悲しみに便乗した儀式によって利益を得ている、ということへのからかいや批判から生まれている。最近まで、葬式仏教においては執行主体が地域や坊さんにあり、故人との別れを坊さんが儀式にのっとり導くことに地域は同調し、協力していた。しかし、葬儀社主導の現状は、その「葬式仏教」までも坊さんから取り上げてしまうかの勢いだ。つまり「葬式も満足に勤めることができない坊さん」が出現しているのである。しかも町の中に増え続ける葬儀ホールは、寺の存在意義を失わせてしまっている。何のための本堂なのか、何のための境内地なのか、何のための宗教的施設なのか。⁽¹²⁾

では神宮寺で行われた葬儀は、具体的にどのようなものか次に略記する。筆者が見させていただいたのは、88歳で亡くなった檀家の女性のものであった。会場は、神宮寺観音堂である。小さな体育館ほどもあるホールの正面に観音が祀られているので観音堂なのだが、音響・照明・映像の施設が完備しているホールである。葬儀受付で、「〇〇さん 葬儀式・お別れ式次第」、その横に戒名が書かれ、めくると般若心経が記載され、裏面に葬儀式とお別れ会の次第が記された冊子が渡される。会葬者は25名ほどである。正面のステージには花で作られた祭壇が飾られている。他の会場ならば供花として供えられる花代を含めて祭壇が作られるので、喪主の負担は軽減されるのだという。葬儀式では、山口百恵の「さよならの向こう側」をBGMに、高橋氏が作った故人のプロフィールを示す映像が祭壇の上に映写され、これも高橋氏が故人や遺族から聞き取って作った、故人の生きざまの中核となるような文章が映写・朗読され、会葬者は式の中に引きこまれる。続いて導師入堂があり戒名が授与された。仏教に基づく儀式については、その意味が丁寧に説明される。次に会葬者で般若心経を唱和した後、引導が渡された。最後に、ピアノ曲をバックに観音経が読経された。これで儀式は終わり、お別れ会に移った。戒名に込めた思いや遺族に贈る言葉を高橋氏が語り、お別れの言葉を親族の方が述べた。次に弔電が読まれ、「花」をBGMに全員でお焼香。初七日忌をして喪主が会葬者と寺にお礼の言葉を述べ、お別れ会は終わった。続いて会場の後ろ側がパーティーションで仕切っており、そちらに場所をかえて精進落しとなった。

葬儀式、お別れ会ともに、一方的に仏教の論理により故人を冥途に送るという寺主体の儀式ではなく、音楽や映像の間にさりげなく仏教を配置して故人の人柄をしのび、お別れの時間を共有するという雰囲気のものであった。ピアノ曲と観音経のコラボレーションは耳に心地よいものであったが、お経にありがたみを感じた人々にとっては、違和感を感じるものであったかもしれない。そうはいつでも、喪主は通夜からはじまって親身になって対応し、ふさわしい葬儀の形式を提案してくれたと、寺に感謝していた。



写真1 神宮寺葬儀

(3) 葬儀社の対応

急速に変化する葬儀という市場に対して、業者はどのように対応しているか。JETROの、「日本の葬祭業の動向」に関するレポートでは、「葬祭業者が現在行っている主要な営業戦略には、顧客の（事前の）囲い込みや、葬儀などに関するセミナー、研修会などがあげられる。この手法は、冠婚葬祭互助会が過去に顧客の囲い込みやセミナーの開催などによって互助会員とのコミュニケーションを図ることにより、葬祭業市場で大きくシェア拡大したことにより定着したものである。葬祭業は不特定多数のユーザーよりも地域の特定期間ユーザーとより深く接する、いわゆる「地域密着型」の産業としての性格が強く、限られたユーザーへの細かいサービスを行うことによって、事前に顧客を囲い込み、そして良質なサービスの提供によって口コミでさらにユーザーを拡大する、という営業手法が効果的である」と述べている。この分析が実際のところどうなのか、松本近辺で見てみよう。

松本市周辺の中信地方にいくつものホールを展開するH社は、昭和51年に冠婚葬祭の互助会として設立された。当初は婚礼を主体としていたが、16,7年前から葬儀に力を入れ始め、1996年に葬儀専用のホールを松本市内にオープンさせた。それまでは、公民館や寺でおこなう葬儀に、料理やお返し物、必要なら人手などを提供していたが、当時は近隣の手伝いの人が大勢いた。ところが、だんだん組長が葬儀委員長を務めなくなったり、葬式の手伝いに出る人も少なくなったりして、葬家の負担が増大していった。そんな中、都市では葬儀社の専用ホールを使うことが一般的になるのを見て、葬儀専用ホールの建設を進めたのだという。それが今では大町市から塩尻市まで、葬儀場だけで9施設をもつほどに拡大した。しかし、業種が業種だけに新たに施設を建設するについては、周囲の理解を得ることが難しい。死生観が変わったとかいわれているが、縁起でもないという人々の思いは、なかなか払拭できるものではないのである。

塩尻市の、「市街地活性化特別委員会会議録」がインターネットに公開されているが、平成21年8月26日に開催された委員会で、市中心部の大型スーパーが撤退した跡地に、H社が葬祭施設の建設を計画していることについて、次のような話し合いがなされた記録がある。

委員 店そのものが云々というよりも、地元の人たちが、仮に、望まない施設があそこに来たとしたら、それはまちづくりにとってマイナスだと思うのです。その辺の住民の皆さんの温度差というのは、まだまだはっきりしない部分があって、その辺がどうしようもないものであれば、行政としても住民の皆さんとまちづくりについてしっかり納得のいくような説明だとか、話し合いだとか、そういう機会をもっても良いのではないかなというふうに思いますけれど、いかがですか。

経済事業部長 反対をする署名をやっていることにつきましても、具体的に、なんと言いますか、私たちにも間接的に情報が入っただけでございまして、地元の区長さんなり、反対の署名をやっている方たちから、私たちのほうに相談、事前相談とか、そういうことが一切ない状態でございまして、今どのような状態でやっているのかという把握はできておりません。ただ、今おっしゃいましたように、住民の相当数の方がそういうことに、もし、本当に反対であるとか、そういうような意志がまとまってきた段階では、行政の、まちづくりをつかさどる部署としては、そうい

う機会を設けることについて検討はしていかなければいけないという気持ちはしております。

委員長 この件について、私も地元の議員ということで、私の承知をしている限りの話ですが、正式に区の役員から来たとかということではなくしての話ですが、8月12日に、8月5日に区長のほうから役員会の招集があって、役員会の招集を受けて12日に組長会議を開いたと。七区というのは、御存知のように1,300戸余ある大きな区ですが、集まった組長が25人くらいと少なかったという話を聞いております。それで、では賛成、反対、署名運動に対する取り組みの濃淡はどうかということ、やはり、そこの近辺、周囲の人は10人が10人反対だと。少し、こっちへ行くと、うんとなってきた、またずうっと離れると、中には、選択肢が広がっていいのではないかなというような形で、総体全部がまとまったという状況ではない。(以下略)⁽¹⁴⁾

9月2日、この件について新聞が、区としては葬祭場ができるならば、「活性化につながるか疑問だ」とし、「幅広い市民が使い、地域が明るくなるような施設」にと望んでいると報じた。⁽¹⁵⁾同日には企業側が住民説明会を開催した。10月10日の新聞記事によれば、企業側からは、葬祭を主に多目的に使えるセレモニーセンターを建設したいとの考えが示された。一方地元住民からは、「市内にこれ以上葬儀場が必要あるのか」「何もこの場所でもなくても」と疑問の声と、「近隣住民に喜ばれる業態に代えるよう検討を」という要望がでたという。⁽¹⁶⁾その後何回かの説明会を経て、翌年1月には施設は完成して見学会を開いている。

H社では地元の要望も入れ、地域の人が集まれるように敷地内にレストランを併設した。また、月に1度は駐車場を使って地元の農家の人たちが農産物を販売する朝市を開催している。朝市では施設を開放し、集まった人たちをお茶などで接待し、地元に関わり込む努力を続けている。しかし、この件について近隣の方の口は重い。できてしまったから何を言っても仕方がないが、納得しているわけではないという。新聞では、「死をタブー視してきた価値観は変わりつつある」⁽¹⁷⁾と報じるが、死へのケガレ観は簡単に消えるものではない。

H社の事業拡大の歴史は、葬儀が自宅・寺・公民館などから葬儀社で行われるようになった変化をそのまま示すものである。そんなH社の営業課長は、最近の気になる傾向として直葬の増加をあげた。以前は月に1～2件ほどしかなかった直葬が、今は月に5～6件は普通に行われるようになったという。人は亡くなってから24時間経過しないと、火葬や埋葬をすることができない。⁽¹⁸⁾ところが病院は亡くなってしまえばそんなに長時間置いてくれないので、家や業者などの施設へ遺体を搬送して安置し納棺しなければならない。直葬というのは、遺族が自分で埋葬手続きをしてきて、24時間経過すると葬式はしないで火葬場へ直送して火葬し、終わりとするものである。葬儀社は、遺体一旦自宅に帰る場合には病院から自宅へと、自宅から火葬場へとの遺体の搬送を請け負う。遺体が自宅に帰らない場合には、病院から葬儀社の安置場所までの遺体の搬送、遺体の安置、安置場所から火葬場までの遺体の搬送を請け負う。直葬の場合でも葬儀社の担当者は、亡くなったことを知らせる人はいないかと当事者に確認するが、ほとんどの場合通知する人はいないといわれ、火葬場で立ち会うのは数人だけだという。また、菩提寺があれば連絡したほうが良いとも確認するが、だいたいは断られる。それでも、業者と寺との関係が悪くても困るので、檀家のこういう人が亡くなったという連絡だけは、寺に入れておくという。寺に黙って火葬した場合、納骨で寺との間のトラブルとなる。営業課長が聞いた話では、寺に連絡せずに夜中にこっそりと納骨したという例

があったという。

葬儀社にとって、直葬が増えることは死活問題である。遺体を安置してからいきなり火葬にして終わりでは、会社がサービスを提供する場面が少ない。また、葬儀用の広いホールを建設しても、稼働率があまりに低くては維持できないだろう。かといって、利用者の意志を葬儀社が止めることはできない。そこでH社では、施設ごとに月に1回程度の葬祭セミナーを開催し、



写真2 家族葬広告

エンディングノートの書き方を教えたり、悩みの相談に応じたりしている。セミナー参加者の内から、ユーザーの囲い込みを図っているのだろう。また、営業課長は寺の住職の集まりに招かれ、増加する直葬について話したりするという。寺から檀信徒に向けて葬式をおこなう意味について話してもらうことが、利用者への直接的アプローチとして効果的だからだろう。葬儀をおこなうという点では、寺と葬儀社は利害が一致しているのである。

また、一般化しつつある家族葬については、少人数でコストが安い葬式を家族葬と呼ぶのだという程度で、細かな内容についてはそれぞれ異なるという。家族葬が増加するのは、経済状況がよくないせいではないかと業者はみている。また、大都市で資本力がなくてホールをもてない業者が、家族葬という形式を前面に出して、小さな会場を用意して商売を始めたこともあるのではないかと。松本近辺にも家族葬専門の業者が現れているし、大手業者も家族葬専門棟を増設してPRしている。

おわりに

松本市を中心に最近の葬儀の変化と、変化への対応をみてきた。10年以上前に、葬儀の会場が寺や公民館主体から葬儀社へと変わり始めた変化はあっという間に進み、今では葬儀社でやるのは普通になった。そして今度は、葬儀の規模や内容が、ものすごいスピードで変わりつつある。葬儀の変化の要因は、井上治代氏が戦後の墓祭祀の変化を、家的先祖祭祀から近親追憶的祭祀への移行と位置付けたのと同じように、イエが解体したことによる影響が大きいように思われる。⁽¹⁹⁾ 高齢化と人口減少が、家族の形をいやおうなく変形させ、イエを単位とした旧来の儀礼や義理の応酬をしようにも現実的に不可能な状況となったのである。

そうした家族の変容は、むろん一度に起こるわけではなく徐々に変化していくものなのだが、家族の変容が急速すぎて儀礼の変化が伴わず、現実との間にギャップが生じたり、変化した儀礼に慣れない人々が違和感を感じたりしているのが現在である。中でも、現実に対応できていないのが、大部分の寺だと思われる。

そもそも葬式はなぜおこなうのだろう。寺が全くかわからない直葬という新しい形が現れてみる

と、本当に必要なものかどうかが問われてしまう。藤井正雄氏によれば、仏教的に葬儀は、「新亡者に授戒をほどこして仏者としたうえで、引導を与え、死出の旅路を迷うことなくたどれるように導くという二段構成で葬儀式が構成されている⁽²⁰⁾」という。つまり、故人がこの世から浄土へと、迷うことなくたどりつけるように行う儀礼が仏教の行う葬儀なのである。そして、立派に故人をあの世に送った者が、親族や地域社会に故人の継承者として承認されたのである。ところが、最近では故人がゆくべきあの世が意識されなくなったため、以前のように故人に旅支度をさせることもなくなった。また、故人の継承者として承認されるべき親族の数は激減し、地域社会はほとんど機能しなくなった。それらのために、葬儀は故人の旅立ちを整えるという寺と故人を中心とした儀礼というよりも、残された家族中心の別れの儀式と意識されることが多くなった。神宮寺でおこなわれた葬儀について、檀家外で会葬した方が、「神宮寺の偲ぶ会の形式の葬式は心がこもっている。できるなら自分もあんな葬式をしてもらいたい。」と話していることにも、それは表れている。

また、故人はいずれ個性をなくして先祖になり子孫を見守るなどということではなく、残された近しい者の思い出の中では、いつまでも生き続ける。そして、近しかった人々が亡くなるとともに故人の記憶も消滅し、世代を超えて記憶が継承されるということはない。現在では、弔うとは故人と同時代を生きた記憶を持つ者がすることで、系譜を遡ってすることではなくなりつつある。核家族で親を弔うとは、そうしたことだろう。

最後に気になるのは、今後どうやって寺が葬儀に関わるかという事である。イエの継続を前提とした檀家という仕組みが崩壊するのは、そう遠いことではないだろう。ならば、寺は座して消滅を待つのではなく、イエから離れて個人とのネットワークを広げるべきではないだろうか。

註

(1)——表1・2は松本市役所作成の「松本市の統計」をもとに作成した。

(2)——『朝日新聞』2013年7月9日

(3)——『週刊さくいだいら』2013年8月22日

(4)——仏教界からの反発の結果、今は「35000円より。ご相談ください」となって、問い合わせれば教えるという形になっている。イオンのお葬式 <http://www.aeonlife.jp/> 2013年8月30日閲覧

(5)——『週刊仏教タイムス』第2426号 2011年1月1日

(6)——同前

(7)——『SOGI』No.133 P.39 表現文化社 2013年

(8)——同前 P.40

(9)——同前 P.40

(10)——『あなたが旅立つ日のために』 神宮寺

(11)——註7に同じ

(12)——高橋卓志『寺よ、変われ』P.23 岩波新書 2009年

(13)——「日本の葬祭業の動向」JETRO Japan Economic Monthly, February 2006

(14)——「市街地活性化特別委員会会議録」<http://www.city.shiojiri.nagano.jp/gikai/kaigiroku/iinkaikaigiroku/iinkaigijiroku21.files/210826shigaichi.pdf> 2013年8月30日閲覧

(15)——『市民タイムス』2009年9月2日

(16)——『市民タイムス』2009年10月4日

(17)——『朝日新聞』2013年9月6日

(18)——「墓地、埋葬等に関する法律」に以下のような条文がある。第三条 埋葬又は火葬は、他の法令に別段の定があるものを除く外、死亡又は死産後二十四時間を経過した後でなければ、これを行つてはならない。但し、妊娠七箇月に満たない死産のときは、この限りでない。

(19)——井上治代『墓と家族の変容』P.272 岩波書店 2003年

(20)——藤井正雄『現代人の死生観と葬儀』PP.42-43 岩田書院 2010年

(学識経験者、国立歴史民俗博物館研究協力者)
(2013年12月21日受付、2014年5月26日審査終了)

Change of the Meaning of Funeral Services from a Religious Rite to a Farewell : Case Study of Matsumoto City and Its Surrounding Areas

FUKUZAWA Shouji

Recently in Japan, a new word “final activity” (Shu-katsu) has appeared, derived from “job hunting activity” (Shu-katsu). This is a coined word which means “preparation for the end of one’s life” and represents an urgent issue facing Japan as its society is rapidly aging. The focus of final activities is to prepare funeral services and graves, which have changed drastically in recent times. This article specifically examines these changes in Matsumoto City and its surrounding areas in Nagano Prefecture over the last two to three decades, and uses the case study to analyze the responses to the changes from three parties concerned: those approaching the end of their life, temples, and funeral directors.

In Matsumoto City, funeral services were held at temples, community centers, or homes 20 years ago. Then, the venue was shifted to funeral halls managed by funeral directors for the next decade, and now the style is rapidly changing to a family funeral and a cremation service without a funeral ceremony. The factors behind this include the weakening of communities that used to organize funeral services, the nuclearization of the family, the aging of family members, and economic sluggishness. In brief, the funeral style has been forced to change due to altering situations. These transitions have received different responses from each party concerned. For example, those approaching the end of their life have started final activities, through a variety of means, to play a responsible role in funerals, which used to be arranged by following the local customs without any question and entrusted to the local temples and communities. Moreover, in parallel with the trend of simplification, family funerals and cremation services without funeral ceremonies have become more and more common. Driven by this trend of downsizing of funerals, undertakers that expanded their businesses by increasing their own funeral halls have enhanced their efforts to secure customers, such as holding seminars on how to prepare for the end of life. On the other hand, most temples have remained unchanged, relying on the temple patron system, in spite of the trend of downsizing and simplifying of funerals. Only some temples, including Jingu-ji Temple in Matsumoto City covered in this study, are increasing users, besides their patrons, by offering distinctive funeral services with less cost than funeral directors. The reason why funeral services of Jingu-ji Temple have become so popular seems in part because of the reasonable cost and the personality of the chief priest but mainly because the temple anticipated the

changing meaning of funeral services and emphasized the concept of farewell to the deceased instead of their religious logic.

Key words: nuclear family, aging population, family funeral, cremation service without a funeral ceremony, social obligation